

『文芸倶楽部』 小説総目録 その七（明治41年～42年）

山根賢吉編

第十四卷第一号（明治41年1月1日発行）

| | | | | | | |
|----|---|---|---|------------------|-----|-----|
| 真 | か | 偽 | か | 広津柳浪 | 1 | 42 |
| 鞭 | | | 草 | 山田旭南 | 43 | 86 |
| 戀 | 山 | 賤 | | 紅葉山人原作 江見水蔭脚色 | 87 | 104 |
| 母 | | 子 | | 黒河内桂林 | 105 | 158 |
| 頓元 | の | 鞘 | | 幸堂得知 | 159 | 172 |

〔注〕「鞭草」は内題に「くまつら」、「恋山賤」は内題に「こひのやまがつ」と、それぞれルビを付す。〈長広舌〉に、枇杷園胡蝶の「俳席の紅葉先生」、〈活社会〉に、をちこち生の「辯護士」、〈演芸界〉に、青々園の「文芸協会の楽屋」、〈忙中閑〉に、竹の屋主人の「言伝」がある。なお、「日本百美人（上）」として、五十名の女性の写真附録

を添付し、「美人投票用紙」を綴じ込んである。

第十四卷第二号 定期増刊 福笑ひ（明治41年1月15日発行）

題名と筆者名のみを示す。

| | | | | | | |
|---|----|---|---|----|---|---|
| 安 | 太郎 | 大 | 産 | 橘家 | 川 | 蔵 |
| 稲 | 荷 | の | 車 | 柳 | 亭 | 燕 |
| 南 | 山 | の | 虎 | 西 | 尾 | 麟 |
| 道 | 具 | 屋 | 屋 | 三 | 遊 | 亭 |
| 五 | 色 | の | 鳶 | 宝 | 井 | 馬 |
| か | つ | ぎ | や | 春 | 風 | 亭 |
| 瓶 | 火 | 事 | | 三 | 遊 | 亭 |

木村初陣 一龍斎貞山
 のめる 柳家小さん
 松 曳 三遊亭小四朝
 鎧 試 し 真龍斎貞水
 締 込 み 三遊亭円右
 磯 の 鮑 都々逸扇歌
 御 落 胤 柴田 啓

野 幣 間 三遊亭円遊
 福 葛 猫遊軒伯知
 狂 歌 合 せ 柳亭左楽
 桂 昌 院 錦城斎典山
 大 工 調 三遊亭円喬

(注)「木村初陣」の作者名は、内題では「一龍斎貞水」、
 「福葛」の内題は、「福葛」。《雑録》に、藤沢浅二郎の
 「女優問題」、長野晴浜の「文士の娘」、山田馬太郎の「続
 京都花柳界の呪咀」がある。

第十四巻第三号(明治41年2月1日発行)

都 会 生田 葵山 1 168
 ひ と り 正岡 秋子 69 110

鼻 眼 鏡 コナンドイル作
 由 井 正 雪 勝間舟人 訳
 岡 本 綺 堂 146 182
 (注)「鼻眼鏡」は翻案、「由井正雪」は脚本である。《三
 十棒》に、大町桂月の「男女雑観」、《活社会》に、山田春
 塘の「剪花売」、若菜胡蝶園の「当世煙草小売店」、雪泥子
 の「きん隠し洗ひ」がある。

第十四巻第四号(明治41年3月1日発行)

繫 縛 三島 霜川 1 76
 誘 惑 板橋 星 涙 77 106
 借 金 森岡 駈 外 107 161
 (注)《長広舌》に、麴街子の「新富町の今昔」がある。

第十四巻第五号(明治41年4月1日発行)

頬 白 泉 鏡 花 1 96
 真 田 の 妻 山田 桂 華 97 112
 髓 松 影 山岸 荷 葉 113 168
 真 の 愛 鈴木 秋 花 169 186
 (注)「真田の妻」「真の愛」は脚本。後者の「真」には、
 内題で「まこと」とルビを付す。《長広舌》に、岡本葎城

の、「浅草公園の今昔」があり、(時報)に、「本誌の被告事件」として、十四卷三号の「都会」が「風俗壊乱」と認められ、「発行人石橋助三郎、被告生田益五郎にそれぞれ二十円の罰金」の判決があり、控訴の手続きをしたことを記載している。

第十四卷第六号 臨時増刊 講談落語花くらべ(明治41年4月15日発行)

題名と筆者名のみを示す。

| | | | | | |
|---|---|---|----|---|------|
| 小 | 西 | 屋 | 神田 | 松 | 鯉 |
| は | な | き | 都々 | 逸 | 扇歌 |
| 月 | の | 夜 | 錦 | 城 | 斎典山 |
| 花 | 見 | の | 三 | 遊 | 亭円左 |
| 小 | 町 | 桜 | 邑 | 井 | 一 |
| 花 | 見 | 酒 | 三 | 遊 | 亭円蔵 |
| 秋 | 色 | 桜 | 西 | 尾 | 麟慶 |
| 親 | 子 | 茶 | 桂 | 文 | 治 |
| 亀 | 甲 | 縞 | 一 | 龍 | 斎貞山 |
| お | 花 | 衆 | 三 | 遊 | 亭小円朝 |
| 醍 | 醐 | の | 柴 | 田 | 蕉 |
| 花 | 見 | | | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|----|
| 百 | 年 | 目 | 柳 | 家 | 小 | さん |
| 東 | の | 花 | 真 | 龍 | 斎 | 貞水 |
| 六 | 尺 | 棒 | 三 | 遊 | 亭 | 遊三 |
| 名 | 作 | 左 | 三 | 遊 | 亭 | 桃葉 |
| 巽 | の | 辻 | 三 | 遊 | 亭 | 円喬 |
| 祐 | 天 | 吉 | 神 | 田 | 伯 | 山 |
| 子 | | 宝 | 柳 | 亭 | 燕 | 枝 |
| 小 | 袖 | 幕 | 猫 | 遊 | 軒 | 伯知 |
| さ | ら | 屋 | 三 | 遊 | 亭 | 円右 |

(注)「花見酒」の作者名は、内題では「橘家円蔵」。「東の花」の内題には「江戸自慢」の角書がある。

第十四卷第七号(明治41年5月1日発行)

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|----|-----|-----|----|
| 行 | 方 | 不 | 明 | 江 | 見 | 水 | 蔭 | 1 | 77 |
| 野 | | 花 | 青 | 木 | 秀 | 蜂 | 78 | 108 | |
| 異 | | 熱 | 泉 | 斜 | 汀 | | 109 | 165 | |
| 御 | 存 | 蝶 | 千 | 鳥 | や | なぎ | 166 | 191 | |
| | | | | | も | く | | | |
| | | | | | あ | ん | | | |
| | | | | | 補 | | | | |

(注)「野花」は、内題に「やくわ」とルビがあり、作者名は「青木秀峰」とある。「御存蝶千鳥」は、内題に「ごぞんじちやうちどり」のルビがあり、脚本である。(三十三)

棒」に、細越夏村の「黄口婆言」がある。

第十四卷第八号(明治41年6月1日発行)

| | | | | | |
|---|---|----|----|-----|-----|
| 歴 | 影 | 川上 | 眉山 | 1 | 52 |
| 行 | 交 | 路 | 本山 | 53 | 123 |
| | | | 荻舟 | | |
| 證 | 道 | 言 | 土肥 | 124 | 164 |
| | | | 春曙 | | |

(注)「三十棒」に、棕蓮花の「魁屋」、〈長広舌〉に、玄々子の「文明的の魔術」がある。

第十四卷第九号(明治41年7月1日発行)

| | | | | | | |
|---|---|---|----|----|-----|-----|
| 誰 | が | 子 | 広津 | 柳浪 | 1 | 55 |
| 恋 | 不 | 足 | 村山 | 鳥還 | 56 | 90 |
| 狂 | | 炎 | 山田 | 萍南 | 91 | 122 |
| 水 | の | 泡 | 伊豆 | 紫葉 | 123 | 155 |

(注)〈活社会〉に、猪猡入道の「僧侶の生活」、紫蘭園主人の「海貝周旋所」があり、〈忙中閑〉に、石橋思案の「嗚呼眉山君」がある。

第十四卷第十号 臨時増刊 麟談十八番(明治41年7月15日発行)

題名と筆者名のみを示す。

| | | | | |
|---|---|---|----|-----|
| 河 | 内 | 山 | 錦城 | 斎典山 |
| 二 | 度 | 目 | の | 清書 |
| 俠 | 妓 | 小 | 勝 | 神田 |
| 吃 | 又 | 平 | | 猫遊軒 |
| 東 | 西 | 男 | 競 | 伯知 |
| 武 | 士 | 氣 | 質 | 桃川 |
| 脊 | 割 | 正 | 宗 | 如燕 |
| 小 | 猿 | 七 | 之 | 宝井 |
| 大 | 垣 | 平 | 八 | 馬琴 |
| 甲 | 斐 | 勇 | 吉 | 田 |
| 関 | 根 | 弥 | 次 | 伯 |
| 忠 | 孝 | 二 | 筋 | 山 |
| 一 | 心 | 太 | 助 | 慶 |
| 清 | 正 | 替 | の | 神 |
| 孝 | 女 | お | 貞 | 田 |
| 実 | 説 | 明 | 鳥 | 松 |
| 麴 | 町 | 三 | 軒 | 鯉 |
| | | | | 知 |
| | | | | 燕 |
| | | | | 琴 |
| | | | | 龍 |
| | | | | 慶 |
| | | | | 山 |
| | | | | 吉 |
| | | | | 玉 |
| | | | | 水 |
| | | | | 林 |
| | | | | 若 |
| | | | | 英 |
| | | | | 昌 |
| | | | | 車 |

(注)「武士氣質」の内題には、「眞性」の、「孝女お貞」には「眞誠」の角書がある。〈雜録〉に、空板生の「如何にし

て講談師と成りし乎」があり、〈雑報〉に「都会」の控訴が棄却せられた旨を記している。

第十四卷第十号 (明治41年8月1日発行)

| | | | |
|-------|------|-----|-----|
| 是非もなき | 塚原波柿 | 1 | 24 |
| 小妻日記 | 岩田烏山 | 25 | 109 |
| 哀 | 倉富砂邱 | 110 | 133 |
| 独 | 小栗風葉 | 134 | 156 |

(注)「独」は脚本。内題に「ひとり」とルビを付す。
 「哀」には「あはれ」とルビを付す。〈三十棒〉に、大町桂月の「川上眉山を吊ふ」、MU生の「川上眉山論」があり、〈演芸界〉に、荷葉の「命の安売(文士劇公演会と紅葉祭)」がある。

第十四卷第十二号 (明治41年9月1日発行)

| | | | |
|------|-----------------|-----|-----|
| 雲 | 徳田秋声 | 1 | 48 |
| 門 | 長谷川時雨女史 | 49 | 98 |
| 千手之前 | トルストイ著 逸見士峰訳 | 99 | 131 |
| | 山田桂華 | 135 | 154 |

(注)「千手之前」は脚本。「門付」冒頭に、「茲に訳出す

る作物は独語エルツェルング(物語)の名の下に蒐められたるものにて、物語ある紀行の類なり」とある。〈活社会〉に、斬雲の「朝鮮女」がある。

第十四卷第十三号 (明治41年10月1日発行)

| | | | |
|-----|--------|-----|-----|
| 二郎経 | 高山田美妙 | 1 | 46 |
| 外 | 泊黒河内桂林 | 47 | 86 |
| 半 | 而徳永有鄰 | 87 | 112 |
| 落 | 風海賀変竹 | 113 | 166 |

(注)「落胤」は脚本。巻頭の写真「釧路名花」中に「鴨虎内小蝶小奴」がある。〈三十棒〉に、高須梅溪の「放言百態」、大町桂月の「宿屋論」があり、〈長広舌〉に、斬雲の「朝鮮の名物」がある。

第十四卷第十四号 定期増刊 観心中隠 (明治41年10月15日発行)

題名と筆者名のみを示す。

| | |
|------|-------|
| 髪結権次 | 錦城斎典山 |
| 品川心中 | 橘家円蔵 |
| お染久松 | 桃川如燕 |

阿 七 柳家小さん

おその六三 一龍齋貞山

すゞしろお花 三遊亭円右

東山女夫塚 泰々齋桃葉

西海浪隆盛 桂 栄翁

おかめ与兵衛 猫遊軒伯知

若草双紙 三遊亭小円朝

心中奈良座 神田伯山

函館三人心中 柳亭燕枝

三勝半七 西尾麟慶

市松おむら 三遊亭円喬

唐模様 神田松鯉

(注)《雑録》に、垂柳庵の「吉原の心中」がある。

第十四卷第十五号(明治41年11月1日発行)

星 女 郎 泉 鏡花 1 1 111

鑑 モウバッサン作 吉田白甲訳 112 1 122

平凡ぎらひ 竹内政女 123 1 156

お辰の森 岡本綺堂 157 1 178

(注)「お辰の森」は脚本。《三十棒》に大町桂月の「奥羽

論」、《長広舌》に、春塘の「昔の日本橋」、《活社会》に、
たま坊の「始末屋」、斬雲の「京城すまひ」がある。

第十四卷第十六号(明治41年12月1日発行)

更 新 田口掬汀 1 1 49

暗 黒 山田旭南 50 1 114

新 愁 江連沢村 115 1 188

(注)《新流行》の、近藤蕉雨の「料理の献立」中に、「▲
八百善」がある。

第十五卷第一号(明治42年1月1日発行)

半 島 の 影 江見水蔭 2 1 86

三 郎 盛 綱 山田美妙 87 1 131

七 騎 落 篠山吟葉 132 1 158

(注) 各作品の最初に作者の写真を掲載。内題・作者名
は、各作者筆。以下の号、この類多し。「七騎落」は脚本。

《長広舌》に、薄田斬雲の「高麗朝鮮の伝説」、樹下石上
人の「貧民の正月」、《活社会》に、倒扇子の「御宝光」、
緑之助の「裝飾屋」、《三十棒》に、大町桂月の「日本国民
の一問題」がある。

第十五卷第二号 定期増刊 題名人揃 (明治42年1月15日発行)

題名と筆者名のみを記す。

| | |
|-------------|---------|
| 法楽舞 (踊と書) | 三遊亭円喬 |
| 肉附の面 (面師) | 一龍斎貞山 |
| 紫檜楼 (狂歌) | 春風亭柳枝 |
| 軍神の旗 (書) | 柴田 馨 |
| 七福神 (彫刻) | 三遊亭円左 |
| 通し矢 (弓術) | 宝井 馬琴 |
| 白井左近 (易) | 柳家小さん |
| 誉の太刀風 (劍術) | 田 辺 南 龍 |
| 西 行 (和歌) | 三遊亭円橘 |
| 九 紋 龍 (棒) | 神 田 松 鯉 |
| ういらう壳 (俳優) | 猫遊軒伯知 |
| 名人長次 (指物師) | 三遊亭円右 |
| 赤羽根の天狗 (柔術) | 真龍斎貞水 |
| 荒川高俊 | 伊藤 痴遊 |
| 梅の春 (音曲) | 都々逸扇歌 |
| 芭蕉翁 (俳諧) | 宝井 琴窓 |

破戒そが 山崎紫紅

(注) (一) 及びその中の文字は、内題にのみ記されているが、便宜上記入した。「破戒そが」は脚本。「誉の太刀風」の内題には、「鯉」の角書がある。「雑録」に、窪村の「大書」がある。

第十五卷第三号 (明治42年2月1日発行)

| | | |
|---------|-------|-----------|
| 機 屋 の 娘 | 遅塚 麗水 | 2 1 59 |
| 一 心 | 飯田 旗軒 | 60 1 119 |
| 留持 参 金 | 福田 琴月 | 120 1 165 |

(注) 「持参金」は脚本。「長広舌」に、蕉雨生「ちやら次追懐談」、〈忙中閑〉に、秋芳子「千住のヤツチャ場」がある。

第十五卷第四号 (明治42年3月1日発行)

| | | |
|---------|-------|----------|
| 殺 生 関 白 | 宮崎 三味 | 2 1 77 |
| そ の 声 | 細越 夏村 | 78 1 96 |
| 田 舎 女 | 泉 斜 汀 | 97 1 136 |

(注) 「殺生関白」は脚本。「活社会」に、白眼子の「精神病院の裏面」、〈忙中閑〉に、児玉花外の「馬肉屋」がある。

第十五卷第五号 (明治42年4月1日発行)

| | | | | | | | | |
|---|---|---|------|-----|---|-----|---|-----|
| 紫 | 手 | 綱 | 泉 | 鏡 | 花 | 2 | 1 | 60 |
| 老 | 猩 | 々 | 佐藤露英 | 女史 | | 61 | 1 | 94 |
| 機 | 牲 | 々 | キツプリ | ンゲ著 | | 95 | 1 | 107 |
| | | | ユノ | 露村著 | | 108 | 1 | 178 |
| | | | 佐藤 | 紅緑 | 訳 | | | |

(注)「犠牲」は脚本。〈長広舌〉に、斬雲の「朝鮮小話」、
 〈活社会〉に、迎月生の「電話売買周旋業」、青木秀峰の
 「屠獸所」、椋本蓮花の「合百師」、四六郎の「線路掃除
 夫」がある。

第十五卷第六号 定期増刊 櫻鷗談武勇鑑 (明治42年4月15日発行)

題名と筆者名のみを記す。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|
| 天 | 正 | 三 | 勇 | 士 | 秦 | 々 | 齋 | 桃 | 葉 |
| 笹 | 野 | 権 | 三 | 郎 | 桃 | 川 | 如 | 燕 | |
| 山 | 吉 | 新 | 八 | 郎 | 放 | 牛 | 舍 | 桃 | 林 |
| 皆 | 鶴 | 新 | 八 | 郎 | 錦 | 城 | 齋 | 典 | 山 |
| 大 | 久 | 保 | 彦 | 左衛門 | 桃 | 川 | 若 | 燕 | |
| 柳 | 川 | 庄 | 八 | | 西 | 尾 | 麟 | 慶 | |

第十五卷第七号 (明治42年5月1日発行)

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|
| 盲 | 人 | 米 | 市 | 田 | 辺 | 南 | 龍 | | |
| 岩 | 見 | 重 | 太 | 郎 | 真 | 龍 | 齋 | 貞 | 水 |
| 伊 | 東 | 惣 | 太 | | 清 | 神 | 舍 | 英 | 呂 |
| 宮 | 本 | 武 | 藏 | | 神 | 田 | 伯 | 山 | |
| 塚 | 原 | ト | 伝 | | 邑 | 井 | 貞 | 吉 | |
| 加 | 藤 | 小 | 次 | 郎 | 宝 | 井 | 馬 | 琴 | |
| 行 | 者 | 武 | 松 | | 神 | 田 | 松 | 鯉 | |
| 坂 | 上 | 田 | 村 | 磨 | 猫 | 遊 | 軒 | 伯 | 知 |
| 荒 | 木 | 又 | 右 | 衛門 | 一 | 龍 | 齋 | 貞 | 山 |
| 武 | 藏 | 坊 | 辨 | 慶 | 柴 | 田 | 南 | 玉 | |

(注)「山吉新八郎」の内題には、「山吉」の角書がある。
 〈雑録〉に、思案外史の「僕の学生時代」、〈付録〉に、山
 崎紫紅の「山崎孔明」がある。

(注)「百足丸」は脚本、内題に「むかでまる」とルビを
 付す。〈長広舌〉に、笹野椋鳥の「談判事件引請所」、迎月

生の「頼母子講の今昔」、〈演劇界〉に、黒法師の「大義附景氣」、〈活社会〉に、難陀羅法師の「苦学生を売物にする商売」、青木秀峰の「火葬場」、〈新流行〉に、近藤蕉雨の「洋傘と傘」がある。

第十五卷第八号（明治42年6月1日発行）

見 得 競 べ 田 口 掬 汀 2 1 47
 後 悔 半 井 桃 水 48 1 108
 外 套 ゴーゴリ著 109 1 145
 西本翠蔭訳
 女 だ て ら 正 岡 秋 子 146 1 187

（注）「見得競べ」は脚本。〈活社会〉に、秀峰子の「空中労働」、エス生の「女理髮師」、胡蝶園の「新亀戸」がある。

第十五卷第九号（明治42年7月1日発行）

親 の 面 塚 原 波 柿 2 1 27
 万 里 矢 田 村 松 魚 28 1 86
 月 給 日 武 田 桜 桃 87 1 136
 振 袖 火 事 岡 本 綺 堂 137 1 172

（注）「振袖火事」は脚本。「月給日」の内題の作者名は「鶯塘子」、〈活社会〉に、仏性子の「華嚴の秘密」、熱汗

子の「地下労働」、猪隈入道の「葬儀屋」があり、〈忙中閑〉の「眉の跡」に「これは故川上眉山氏の門下生諸子が、亡師に対する追憶を宛めたるもの……（思生識）」とあって、以下の文章を取っている。

山田旭南 「死」／関谷楚山 「其当時」／吉田鼓山
 「入門当時」／河村湘山 「四年間の印象」／下村耕圃
 「思出」／岩田烏山 「其草を刈れ」
 〈新流行〉に、近藤蕉雨の「浴衣地」がある。

第十五卷第十号 臨時増刊 避暑の友（明治42年7月15日発行）

題名と筆者名のみを示す。

| | |
|-------------|-----------|
| 田 毎 の 月 | 一 龍 斎 貞 山 |
| 百 人 坊 主 | 橘 家 川 藏 |
| 浪 裏 白 跳 張 順 | 神 田 松 鯉 |
| 夏 ど ろ | 柳 家 小 さ ん |
| 熱 海 の 湯 煙 | 邑 井 一 |
| 富 上 詣 り | 三 遊 亭 円 右 |
| 那 智 の 瀧 | 錦 城 斎 典 山 |
| 仕 返 し | 三 遊 亭 遊 三 |

橋間の白浪 神田伯山
 茗荷宿屋 柳亭燕枝
 波布娘 西尾麟慶
 湯屋番 三遊亭円喬
 松平長七郎 猫遊軒伯知

(注)「へきつろく」に、兎玉花外の「活動の眼」がある。

第十五卷第十号(明治42年8月1日発行)

六郎景澄 山田美妙 2136
 一年 岩田烏山 37103
 いちけもの 山田萍南 104160
 三 簡条 尾崎紅葉原著 161182
 栗島狭衣脚色
 (注)「三簡条」は脚本。《活社会》に、エス生の「露西亞パン売子」、しうほう「旅宿業の今昔」、うまのかみの「夏の巴里」、馬太郎の「柳原の古着屋」、《長広舌》に、蒼鶴先生の「水菓子物語」、猪隈入道の「水族館の側面」がある。

第十五卷第十二号(明治42年9月1日発行)

美 広津柳浪 2110

生 死 大倉桃郎 111156
 ぬけがら 森 晩紅 157201
 (注)《活社会》に、椋蓮花の「虫うり」、四六郎の「甘酒」、《新流行》に、近藤蕉雨の「寶石と宝玉」がある。

第十五卷第十三号(明治42年10月1日発行)

里の女 徳田秋声 2139
 念力 山岸荷葉 4069
 エトナの雪 佐野天声 7090
 腰かけられぬ人 黒田湖山 91129
 学者の血 山崎紫紅 130171
 (注)「学者の血」は脚本。《活社会》に、猪隈入道の「博徒の検拳」、石井研堂の「釣の餌問屋」、《忙中閑》に、赤毛布の「秋の吉原」、兎玉花外の「細暖簾の秋」、《新流行》に、近藤蕉雨の「婚礼の祝と調度」がある。

第十五卷第十四号 定期増刊 醜統経談摘(明治42年10月15日発行)

題名と筆者名のみを示す。

馬 盤のお岩 西尾麟慶

反魂香 春風亭柳枝

義犬準太郎 真龍齋貞水

美人燈籠 猫遊軒伯知

駕籠の夢 三遊亭小四朝

六部機屋 泰々齋桃葉

子守唄 錦城齋貞山

不忍の早桶 五明樓玉輔

佐倉宗五郎 清草舎英昌

栗橋宿 三遊亭円喬

宇和島奇聞 一龍齋貞山

不動坊火焰 柳家小さん

鈴ヶ森題目石 神田伯山

宮の越檢校 三遊亭円右

姐妃のお百 宝井琴窓

(注)「子守唄」の内題には「小唄」の角書がある。

第十五卷第十五号(明治42年11月1日発行)

落伍者 三島霜川 2 70

兄思ひ 麻村電波 71 100

元治の秋 岡本綺堂 101 139

家内安全 山田春塘 140 162

(注)「元治の秋」と「家内安全」は脚本。《長広舌》に、若草居の「秋刀魚の話」がある。

第十五卷第十六号(明治42年12月1日発行)

吸血鬼 長田秋涛 2 79

うたがひ 小林颯月 80 106

あ の 娘 小山集川 107 151

友 馬場清唱 152 173

(注)「吸血鬼」は脚本で、内題の作者名は「長田秋涛訳述」とある。《活社会》に、迎月子の「年の中尾篤夢手記」とある。《活社会》に、迎月子の「年の市の飾売」、清秋庵の「木賃宿」、《長広舌》に、四海浪人の「東京市の共同便所」、《忙中閑》に、石橋思案の「嗚呼春塘君」、思案外史の「夜長物語(川上眉山人の滑稽趣味)」がある。

本目録の作成にあたっては、架蔵誌のほか、国立国会図書館、日本近代文学館、東京大学中央図書館所蔵誌によった。